

# 保育の場での人間関係の形成における感染症予防の影響 — 保育者養成校の学生を対象としたマスク着用に関するアンケート調査を通して —

真鍋 顕久      水谷 亜由美      本多 恭子  
岐阜聖徳学園大学教育学部

## The influence of infectious disease prevention on the formation of relationships in childcare settings: A questionnaire survey on mask wearing for students of a pre-school teacher training school

Akihisa MANABE, Ayumi MIZUTANI, Yasuko HONDA

キーワード： 領域「人間関係」 マスク着用 信頼関係 アンケート調査 学生

### I. はじめに

新型コロナウイルスの感染を長期的に防ぐための新しい生活様式が広がるなか、保育の場でもマスクの着用が定着している。

マスクとは、日本衛生材料工業連合会の「マスクの表示・広告自主基準」（平成25年3月15日改定）によれば、「天然繊維、化学繊維の織編物または不織布を主な本体材料として、口と鼻を覆う形状で、花粉、ホコリなどの粒子が体内に侵入するのを抑制、また、かぜなどの咳やくしゃみの飛沫が体内外に侵入、飛散するのを抑制することを目的に使用される、医薬品医療機器等法に該当しない衛生用品をいう」と定義されている。

厚生労働省では、新型コロナウイルスの感染予防対策として事務連絡である「保育所等における新型コロナウイルスへの対応について」において、留意事項のなかで、「新型コロナウイルスについては、風邪やインフルエンザと同様に、まずはマスク着用を含む咳エチケットや手洗い、アルコール消毒等により、感染経路を断つことが重要である」として、マスク着用を推奨している。さらに、保育現場の感染防止対策への支援として、保育施設の職員に一人一枚布製マスクが行き届くよう配布するとともに、都道府県が保育施設に対して、子ども用のマスクを配布する費用の全額補助を行っている。

こうした取り組みにより、現状では保育の場でのマスク着用が多くみられるようになったが、保育者においては、マスクが笑顔を隠してしまうことの心配や、マスク着用が子どもの成長に与える影響なども懸念されている。

保育の場では、保育者や子ども同士とのさまざまな人との関わりのなかで、自分の五感（視覚・聴覚・身体感覚・嗅覚・味覚）で人間関係を体験することが、子どもにとって大切なことである。しかし、マスクによりお互いの顔が隠されることは、コミュニケーションの一部が遮断されることになり、幼児期の子どもの人間関係の形成における影響が危惧される。

対面对話では、言語化しなくとも、いろいろな情報を意識的もしくは無意識的に受信・発信している。こうした表情・視線・姿勢・しぐさなどによるコミュニケーションを、非言語コミュニケーション(nonverbalcommunication)という。近年では、多くの研究が言語的情報以外を使って行われる非言語コミュニケーションの重要性を明らかにしている。

また、メラビアン(Mehrabian)は、対面对話による意思疎通においては、言語コミュニケーションだけではなく、表情や視線、姿勢、身体動作といったさまざまな非言語によるメッセージを合わせて用いることにより行われており、メッセージ全体の印象を100%とした場合に言語内容の占める割合は7%、音声と音質の占める割合は38%、表情としぐさの占める割合は55%であると述べている<sup>1)</sup>。つまり、コミュニケーションのうちの半分以上は非言語的な視覚情報によって判断されているのである。

さらに、竹原らは、顔の表情を「情報の掲示板」と言い、個人の内的感情を表出しやすい要素で、対人コミュニケーションにおいて重要であると述べている<sup>2)</sup>。すなわち、顔の表情は、言語化しなくともその人の感情を意識的または無意識的に相手へ発信しているのである。

表情は、人間の感情についての多くの情報を提供し、他者の表情を見た者はこれらの情報をもとに自分の行動を調整し<sup>3)</sup>、他者との関係性を築いていくことになる。

幼児期の子どもは、言語的コミュニケーションが限定的となるために、特に相手のこうした顔の表情や口の動きから様々なことを読み取ることになる。したがって、保育者の意図的な表情表出は幼児に意図を伝える有効な手段に成り得ると考えられている。また、保育者にとっては、子どもの表情は子どもの心の動きを知る最大のヒントにもなる<sup>4)</sup>。

これまでのところ、保育現場における大切なコミュニケーション手段である表情の一部を隠してしまうマスク着用に関する研究については、西舘による「マスク着用が保育に及ぼす影響に関する保育者の認識」<sup>5)</sup>しかみられない。

そこで、本稿では、アンケート調査を通して、保育の場でのマスク着用が、人間関係の形成に及ぼす影響について本学の保育専修の学生がどのように捉え、子どもとのかかわりを考えているのかを分析する。

## II. 調査方法

### 1. 調査協力者

調査協力者は、本学の2020年度教育学部保育専修の3年生と4年生であり、アンケート調査に同意を得られた53名を分析対象とした。調査時点では、3年生は領域「人間関係」の講義と保育実習Ⅰを終えており、4年生はさらに幼稚園教育実習も終えている。したがって、3・4年生ともに、人間関係に関する知識をもって保育の場において体験的に学んでいると考えられる。そこで、3・4年生を対象とし、調査を行った。なお、学生の回答は主にコロナ感染症拡大前の実習経験等に基づいている。

### 2. 調査内容

保育の場におけるマスク着用に関するアンケート調査を行った。調査内容は、①保育の場において学生本人や子どものマスク着用でのかかわりの経験の有無について、②保育の場で学生本人あるいは子どもがマスク着用の際、子どもとのかかわりに関して困った（困るであろう）ことについて、③保育の場における保育者や子どものマスク着用が人間関係の形成に及ぼす影響について、④今後、学生本人や子どもがマスク着用している際に、子どもとのかかわりに関して心がけることについて、の以上である。

なお、①に関しては、4項目（「自分と子どもの両者がマスクを着用した状態での経験がある」、「自分はマスクを着用しているが子どもはマスクを着用していない状態での経験がある」、「自分はマスクを着用していないが子どもはマスクを着用している状態での経験がある」、「自分あるいは子どもがマスクを着用した状態でのかかわりの経験はない」）から該当するものを全て選択してもらった。②③④に関しては自由記述式となる。

### 3. 手続き

2020年7月に、Googleフォームにより調査協力を依頼するとともに質問紙を送信し、学生からの回答用紙の返信により回収を行った。

### 4. 倫理的配慮

アンケート調査は、今後の講義のための参考にするとともに研究以外の目的では使用しないこと、回答の有無や内容は成績と無関係であり、記述内容によって不利益を被らないことを、予め伝えたくて実施した。アンケートの回答をもって、研究協力に同意を得たものとした。

### Ⅲ. 結果と考察

アンケート調査で得られた回答の結果について、項目ごとに示す。なお、保育の場での人間関係には、保育者と子どもとの関係（保育者と個々の子どもとの関係、保育者と子ども集団との関係）とともに子ども同士の関係等もあるが、今回のアンケートの回答では、保育者と子どもとの関係以外のことについてはほとんど触れられていなかったことや、さらに保育の場での人間関係は保育者との関係が基本となることから、本稿では、保育者と子どもとの関係（保育者と個々の子どもとの関係、保育者と子ども集団との関係）に目を向けた分析に限定する。

#### 1. 保育の場におけるマスク着用時の子どもとのかかわりの経験の有無

「保育の場におけるマスク着用時の子どもとのかかわりの経験の有無」について、表1にその結果を示した。53人中「経験がある」と答えた学生は、32人(60.4%)、「経験がない」と答えた学生は21人(39.6%)であり、「経験がある」と答えた学生の方が多く見られた。また、「経験がある」と答えた学生について、関わった時のマスクの着用状態について尋ねたところ、32人中、「自分と子どもの両方がマスクを着用した状態」が20人(62.5%)、「自分はマスクを着用しているが、子どもはマスクをしない状態」が19人(59.4%)、「自分はマスクを着用していないが、子どもがマスクを着用した状態」が9人(28.1%)と、自分と子どものどちらか一方に、マスクを着用していないケースが多く見受けられた。新しい生活様式により、今後はマスクの着用が定着し、子どもとの関りにおいても不可欠なものになるといえる。

表1 保育の場におけるマスク着用時の子どもとのかかわりの経験<sup>6)</sup>

マスク着用時における子どもとのかかわりの経験がある	自分と子どもの両方がマスクを着用した状態でのかかわりの経験がある	20人	32人
	自分はマスクを着用しているが、子どもはマスクをしない状態でのかかわりの経験がある	19人	
	自分はマスクを着用していないが、子どもがマスクを着用した状態でのかかわりの経験がある	9人	
自分あるいは子どもがマスクを着用した状態でのかかわりの経験が無い		21人	

#### 2. マスク着用時の保育における困り感

「マスク着用時の子どもとのかかわりにおいて困ったこと」について、保育者としての自分がマスクを着用している場合と子どもが着用している場合について、それぞれ自由記述の質問をした。なお、マスク着用時の保育の経験が「ない」と答えた学生には、予測される困り感の記述を求めた。集計の結果、経験の有無によって記述内容に大きな違いは見られなかったことから、まとめて結果と考察を記すこととした。保育の場の経験がなくても、大人同士のやりとりや保育現場以外における幼児とのやりとりから十分に予測されたと考えられる。

学生は、保育者自身がマスクを着用した場合と子どもが着用した場合、どちらの状況においても、「表情」と「声」に関する困難さを挙げていた。「表情」に関しては、53人中47人(88.7%)が記述している。顔の大部分が隠れることに着目し、保育者がマスクをした場合は35人(66.0%)が「保育者の表情が伝わらない」と記載し、「子ども達に自分の表情がどう伝わっているのか」という疑問と懸念を抱いていた。子どもがマスクを着用した場合は33人(62.3%)が「子どもの表情が分からない」という内容を記載しており、「子ども達の表情をどう読み取るのか」という不安を抱えていることが窺えた。

「声」に関しては、53人中39人(73.6%)が注目をしている。「声がこもる」「声が通らない」「口の動きが見えず聞き取りにくい」という困難さを挙げていた。保育者がマスクをしている時(33人、62.3%)は、「声が通らない」「子どもに伝わりにくい」という課題を、子どもがマスクをしている時(26人、49.1%)は、「子どもが話している内容が分からない」「小さい声で話す子に対し、何度も聞き返してしまう」という課題を認識していた。

また、マスクを着用することが「体調管理」に影響することを指摘する学生が18人(34.0%)いた。

その背景には、7月に調査を実施したことがあるだろう。自らの顔を覆うことによる息苦しさの実感に加え、熱中症の危険性に関する報道を目にする機会が増えたことから、熱中症への懸念が多数あげられたと考えられる。子どもの健康・安全にも目を向け、「子どもの体調変化に気づけない」という保育者としての子どもに応じた援助の難しさを指摘する学生もいた。

さらに、このような「表情」と「声」による感情表現の困難さや「体調の変化」への気づきにくさから、子どもの不安感や信頼関係の形成の困難さに注目する学生もいた。保育者がマスクをすることで「警戒されやすい」「怖い印象を与えてしまう」という不安感や、子どもがマスクをすることで「子どもの気持ちに合せた保育がしづらくなる」といった人間関係の構築に関わる内容の記述もあった。

### 3. 保育の場での人間関係の形成にマスク着用が及ぼす影響

「保育現場において保育者や子どものマスク着用は人間関係の形成にどのような影響を及ぼすと思うか」について自由記述の質問をした。なお、マスク着用時の保育の経験の有無によって記述内容に大きな違いは見られなかったことから、まとめて結果と考察を記すこととした。

主な回答として、「信頼関係が築きにくくなる・信頼関係をつくるのに時間がかかる」、「コミュニケーションに困難が生じる」、「人間関係が築きにくい・深めにくい」、「誤解を生むことがある」、「関わりづらくなる」、「壁ができる」、「心の距離ができる」、「コミュニケーションをとる機会が減る」が挙げられる。これらを見ると、信頼関係の構築において何らかの困難が生じるという意味を含んでいると捉えることができる。

このことから、保育現場での保育者や子どものマスクの着用は、コミュニケーションの図りにくさから双方の思いに対する理解にズレが生じるなど、人間関係の形成において保育者と子どもとの信頼関係の構築に何らかの困難さをもたらすと考えることができる。

なお、この設問では、マスク着用の人間関係の形成への影響について具体的な内容を尋ねたにも関わらず、回答では、抽象的な記述内容が多くみられた。すなわち、マスクの着用が人間関係の形成にどのような影響を及ぼすものかを多くの学生はまだ具体的に想像しきれていない状態にあるとみることができる。

ただし、わずかではあるが、マスク着用の人間関係の形成への影響についての具体的な内容を述べた回答もみられた。「子どもは保育者を怖がったりする可能性がある」、「不安感を抱くことにつながる」、「相手の気持ちを読み取ろうとする気持ちが薄れる」、「大きな声で話すことが苦手な子がより話しづらくなる」などである。前者2つは、上述の「やりとりする上で困ること」にも挙げられていた。これらの具体的な内容の回答を踏まえると、マスク着用により保育者の表情がわかりづらく、子どもは保育者の抱いている感情の把握の難しさから恐れや不安を抱くことも考えられる。また、マスク着用により意志疎通が難しくなり、相手との間に壁が生じて心の距離を感じることや、さらには、子どもにとって相手の気持ちを理解しようとする意欲や、自分の気持ちを相手に伝えようとする意欲が薄れてしまうことも危惧される。これらは、いずれも人間関係の形成において信頼関係の構築に何らかの困難さをもたらす影響としてみなしていくことができる。

その他に、「子ども同士では話が聞き取りづらく会話が成立しなくなり、喧嘩になる可能性がある」という具体的でさらに子ども同士の関係性について着目しているものや、「相手の気持ちを自分なりに想像する力はあるのかかもしれない」と具体的なプラスの影響についての回答もみられた。

### 4. マスク着用時の子どもとのかかわりで心がけたいこと

マスク着用時の困難さの実感や人間関係形成への影響を踏まえた上で、「マスク着用時にこころがけたいと考えていること」を自由記述で尋ねた結果、挙げられた内容は表2の通りである。

学生の回答は、「声・話し方」「目による表現」「身振り」「子どもの様子をよく聞く・話を聞く」に関する内容が多く見られた。「声・話し方」「目による表現」「身振り」は、保育者がマスクをすることで生じる保育者の感情の伝達の難しさを和らげ、安心につなげようとする言動である。一方、「子どもの様子をよく聞く・話を聞く」は、子どもがマスクをすることで捉えにくくなっていった心の動きや体調の変化に気づくための言動として記されていた。



まず、「声・話し方」は、心がけたいことで最も多くの記述があった事柄である。保育者の声子どもに聞き取りやすくなるよう、一言一言を大切に、声の大きさや速さ、トーン、声色、活舌、抑揚などを工夫する内容が記されていた。声や話し方に変化をつけることに注目した回答が多く、普段よりもメリハリのある表現を心掛け、保育者の口の動きが見えなくても、声や言葉で伝えたい内容がより正確に、保育者の思いや意図が声で伝わるよう考えていることが分かる。

表2 マスク着用時に子どもとかかわる際にこころがけたいこと

内容（回答数）	記述の具体例（学生の回答のうち、特徴的なものを抽出した）
声・話し方 (37人)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・声聞き取りやすいように明瞭に話す。</li> <li>・ハキハキと大きな声で話したり、話す速さに注意したりして相手に伝わるようにする。</li> <li>・声に抑揚をつけて感情を伝える。</li> <li>・声のトーンを柔らかくしたり、時と場合に応じて変化させる。</li> <li>・言葉のやりとりを大事にする。</li> </ul>
目による表現 (19人)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目や眉で感情がわかるようにする。</li> <li>・普段は目元をにこやかに、何か注意するときは少し厳しい表情（目）にする。</li> <li>・笑顔が伝わるように口だけではなく目を意識して笑う。</li> <li>・目と目を合わせて話す。</li> </ul>
身振り (18人)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身振り、手振りで子どもにわかりやすいように感情を伝える。</li> <li>・身体全体を使った感情の表現を増やす。</li> <li>・リアクションを分かりやすくする。</li> <li>・話を聞いているという態度を、より子ども達に伝わるようにする。</li> </ul>
子どもの様子をよく見る・話を聞く (15人)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの声により耳を傾ける。</li> <li>・子どもの声や言葉など少ない情報の中から気持ちに気づけるように心掛ける。</li> <li>・よく様子を見て、ささいな変化に気づけるようにする。</li> <li>・子どもの行動をよく見る。</li> <li>・元気のなさや声のトーン、呼吸などから体調の変化に注意する。</li> <li>・しぐさや言葉を頼りに子どもの心のうちにあることを大切にする。</li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・視覚的に分かりやすい保育教材を使用する。</li> <li>・明るく振る舞い、子どもに不安な様子を見せないようにする。</li> </ul>

次に、「目による表現」は、マスクで覆われていない目や眉の動きに着目した記述である。視線や目による感情表現を意識することで、にこやかな雰囲気や真剣な雰囲気を伝えようとしていることが分かる。お互いに目と目を合わせることや、あたたかいまなざしを送ることも注目されており、保育者と子どもの人間関係への影響があると捉えていた「子どもの警戒心」を解き、安心感を与えようとしていると考えられる。

そして、「身振り」は、顔や声での表現では伝えきれないことを、より伝わりやすくしようと考えた方法であるといえる。自分の感情を表出するための大きなリアクションに加え、子ども達が「聞いてもらえている」「見てもらえている」と感じるような態度があげられていたことから、子どもとの双方向のやりとりを重視する姿勢も窺えた。

最後に、「子どもの様子をよく見る・話を聞く」に関しては、普段よりも子どもをよく見て、言葉を聞いて、子どもの感情と体調を理解しようと努める姿勢が記述されていた。情報が限られることで、より些細な変化を捉えようとする気持ちや目に見える子どもの言動の背景にあることを捉えようとする意識が高まっているのかもしれない。子ども理解を深め、子どもとの関係性を深めようとする姿勢が読み取れた。

その他にも、視覚的に捉えられる教材で意思疎通を図ったり、保育者の普段と変わらない態度によって不安を和らげたりすることなどがあげられていた。

これらのことから、学生はマスク着用時における子どもとの人間関係の形成において、表情の大切さを再認識し、保育者の豊かな感情の表出と子どもの言動の理解が欠かせないという認識を持っていることが窺えた。自ら発する「声・言葉」と「目の動き」、「身振り」による幅広い表現とともに、「子どもをよく見る・声をよく聞く」あたたかな姿勢によって子ども達に安心感を与え、子どもが他者とのコミュニケーションを楽しむことが出来る環境づくりをしようと考えていることが推察された。

#### IV. まとめ

本稿は、アンケート調査から、学生が保育の場でのマスク着用が人間関係にどう影響すると捉えており、マスク着用時にどう子どもと関わろうとしているのかを検討した。学生へのアンケート調査結果を踏まえると、保育現場でのマスク着用は、人間関係の形成において、保育者と子どもとの信頼関係の構築にマイナス影響を及ぼすことが考えているといえる。

保育者においては、まずはマスク着用による子どもとの信頼関係の構築の困難さをできる限り克服するための対応が求められる。学生は、マスク着用時には、自ら発する「声・言葉」と「目の動き」、「身振り」による幅広い表現とともに、対面対話の際に「子どもをよく見る・声をよく聞く」ことであたたかな姿勢によって子ども達に安心感を与えようと考えていることが推察された。マスク着用時での子どもとの人間関係の形成においては、多くの学生が回答しているように子どもとの直接的コミュニケーションにおいて意思疎通が円滑に進むように留意するとともに創意工夫することは確かに必要となるが、少数意見として「子どもの行動をよく見る」とあるように、園生活のなかでの子どもの行為をすべて表現として見て、そこにその子どもの思いや考えがあると捉え、子ども理解を深めていくことが一層重要になるであろう。津守は、「子どもの思いを追って一緒に歩む中に「表現と理解」がある」<sup>7)</sup>としている。マスク着用時において保育者は、子どもが興味をもっていることや夢中になっているもの、好きなことを認め、それに共感するとともに、子どもが興味をもつ遊びや環境を提供し、保育者も一緒になって楽しみながら、一体感を得られるように展開することで、子どもとの信頼関係を構築できるように一層努めることが肝要である。

なお、マスク着用により意志疎通が難しくなり、子ども同士のいざこざが起りやすくなるなどの子ども同士の関係性への影響に関して検討していくことや、さらには、マスク着用により他者の気持ちを推し量る想像力が養われる点や、親密になることをためらう者にとって、「マスクは安心感をもたらし、着けることで他者とのコミュニケーションをとりやすくしているなどの面をもつ」<sup>8)</sup>ことなど、人間関係の形成へのプラスの影響についても検討していくことは今後の課題である。保育現場でのマスク着用が及ぼす、人間関係の形成における影響の全体像を明らかにしていくためには、さらに園内での多くの具体的事例を洗い出していくとともに、多面的多角的に考察していくことが必要となるであろう。また、コロナウイルス感染症を避けるためには、マスクの着用や手洗いの励行以外にも、三密を回避し、ソーシャルディスタンスを保つことも求められている。

人間関係の形成を図る幼児期において、人との距離をとる日常を過ごしたことで、今後の子ども達の育ちに何らかの影響を及ぼすことが考えられる。したがって、保育者となる学生達は、より「子どもどのような人間関係を築くのか、子ども同士の関係を支えるのか」ということを考え、長期的な視点をもって子どもとかかわっていけるよう養成校においてはその学びの場を設けていく必要がある。

#### 注・文献

- 1) Mehrabian, A. (1968) : Communication without words, *Psychological Today*, 2, 53-55.
- 2) 竹原卓真、長野光朗、鈴木直人 (2003) : モデルの存在とその表情の種類, および背景色が広告の印象に及ぼす影響, *同志社心理*, No. 50, 7-13.
- 3) Reed, L. I., DeScioli, P. & Pinker, S. A. (2014) : The commitment function of angry facial expressions, *Psychological science*, 25 (8), 1511-1517.
- 4) 鏡原崇史 (2017) : 幼児期における表情理解と表情表出—理解しやすい表情素材と大人から見た幼児の意図表情の適切性—, *保育学研究*, 55 ( 2), 116.
- 5) 西舘有沙 (2016) : マスク着用が保育に及ぼす影響に関する保育者の認識, *富山大学人間発達科学部紀要*, 10(2), 125-130.
- 6) 「マスク着用時における子どものかかわりの経験がある」ものは32名であるが、経験があるなかでのマスク着用の状態の3つの項目に関しては該当するもの全てを回答していることから、各項目の人数の合計は32人を超える。
- 7) 津守真 (1979) : 「子ども学のはじまり」, フレーベル館.
- 8) 廣瀬郁美 (2014) : だてマスクがもたらす心理的作用の検討: ふれあい恐怖心性と移行対象の視点から, *年報人間関係学*, 16, 1-13.